

## 文献紹介

# 問芝志保『先祖祭祀と墓制の近代』

## 概要

本書は、近代日本における先祖祭祀や墓のあり方がどのように作り出され、国民的な習俗になったのかを考察するものです。現在の日本では、整然と区画された墓地に家族の遺骨を納める各家の墓を設け、それを代々継承し、墓参りによって先祖への敬意を示すという実践が一般的に見られます。実は、こうした実践は、もともとは様々な様式でなされていた前近代の先祖祭祀が明治期以降に再編されて生まれたものです。本書では明治から昭和戦前期に焦点を当て、先祖祭祀と墓が近代的に再編される過程を明らかにしています。第1部では日本における近代的な先祖祭祀観がどのように登場して普及したのかを考察し、第2部では一つの墓石のもとに家族の遺骨を納める「カロート式家墓」が一般的なものになる過程を考察します。最後に第3部では先祖祭祀についての言説と墓についての言説が合流して「あるべき先祖祭祀と墓」が語られるようになる過程を明らかにします。

## 本プロジェクトとの関わり

現在の日本では火葬後の遺骨を家の墓に入れるのが一般的ですが、1990年代以降、自然葬や散骨といった新しい葬送を求める声や、納骨堂や合同墓のような家の墓とは異なる弔いのあり方のニーズが高まっており、墓選びの面でも身じまいの仕方に様々な選択肢が現れてきています。では、家の墓や先祖祭祀といった考えはいつ頃どのように現れたのでしょうか。「家の墓」はどのような歴史や伝統を持っているのでしょうか。このような歴史的な観点とは、墓選びの方針を決める際に参考になるでしょう。

キーワード：先祖祭祀、家墓、カロート式、墓参り

問芝志保『先祖祭祀と墓制の近代——創られた国民的習俗』（春風社、2020年）。

## 第1部「先祖祭祀と近代」

第1部では近代的な先祖祭祀観がいかに登場したのかが明らかにされます。近代日本の先祖祭祀論を主導した法学者である穂積陳重（ほづみ・のぶしげ）は、明治30年（1897年）以降の不平等条約改正や日露戦争のための外国からの資金獲得といった課題に促され、欧米諸国に日本へ

の好感を持たせるため、日本の先祖祭祀は非文明的なものではなく、歴史的にみても普遍的な行いであり、社会統合機能を持つものだと説明し、文明国にふさわしい実践として海外に向けて発信しました。このとき、日本国民の先祖は皇室の神話的な先祖と繋がっており、これを含

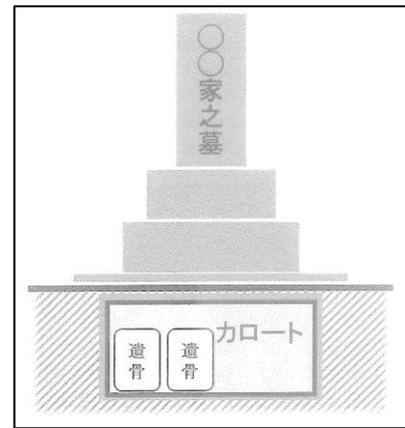
めた先祖の祭祀が日本の精神的基盤であるという論が登場しました。

国内向けには、「日本固有の道徳」を道徳教育の中心にすべきだとして提唱された国民道徳論の普及の過程で、こうした先祖祭祀論が明治40年代から大正期（1912–26年）にかけて尋常小学校や中学校などで教えられました。墓や位牌を大事にすることが教えられたり、地域の偉人の墓をクラスで参拝しに行ったりするなど、墓を中心とする先祖祭祀の教育が行われ、「皇祖へ連なる先祖を祀る民俗」という国家的アイデンティティの定着が起きました。このように、近代国家化の中で先祖祭祀は国民的アイデンティティと結びつけられ、国民的習俗として作り変えられました。

## 第2部「墓制と近代」

第2部では近代的な墓制が登場する過程について明らかにされます。前近代の墓制は時代や身分、地域や社会階層によって様々でしたが、明治初年以降に衛生や土地利用、景観、租税、信教の自由といった近代的な課題のもとで変容し、墓は崇敬の対象や祭祀財産として法制化されました。さらに、墓地は共葬墓地が基本とされましたが、これは檀家のみが墓地を持てる寺院墓地や、地域の人しか埋葬できない従来の墓地とは異なり、宗教や本籍地を問わず、その地で亡くなった人であれば誰でも埋葬できる公共性の高いものでした。こうして墓地法制は明治10年に脱宗教化しました<sup>1</sup>。このような新しい墓地のあり方は、開拓の拠点であった札幌においては、家の顕示や街の景観美化のために中間層の人々によって積極的に進取されていきました。

一方、明治中期から大正期にかけての東京では、西洋的な様式を導入した共葬墓地が設置されるとともに、近世的な墓制が残ったままの寺院墓地も多くありました。関東大震災を契機として寺院墓地は規模を小さくし、舗装された地面に一家一基の墓石を置くことを基本とする特設墓地へと移行していきました。こうして、墓石の中の石室に家族の遺骨をまとめて納めるカロート式の家墓が普及していきました。そして昭和10年代頃になると、造園家やテクノクラートが公園墓地や角柱型カロート式家墓こそ日本精神と民族性、国家の伝統が体现されたものだとして主張し始め、カロート式の家墓が「国民的墓制」になりました（ただし全国的に均質化されるのは戦後のことです）。



典型的なカロート式家墓  
（本書200頁より引用）

## 第3部「昭和戦前期の先祖祭祀と墓制」

第3部では先祖祭祀論と墓論が合流する過程が論じられます。日本では近世以来、有名な墓を訪れて墓に付いた苔を掃き清め、そのひとの事情を味わうという趣味的な実践がありました。しかし、明治30年代頃の東京では墓地環境が変化し、名墓が打ち捨てられてしまうという危機感が募り、民間の団体が墓所の確定や記録、周知といった活動を行いました。大正期の関東大震災以降、国家功労者の墓を文化財として保護

<sup>1</sup> ただし、あくまで寺院墓地や旧来の地縁的な墓地を新たに造ることが出来なくなったというだけで、従来からあるこれらの墓地についてはそのままの使用が可能でした。そのため、この墓地法制の影響を直接受けたのは都市部に新設された墓地に限られ、共葬墓地が全国へと普及するのは第二次世界大戦後のこととなります。

する気運が高まるとともに、道德教育の実践としての墓参りや偉人の墓への参拝という動きが生まれました。

そして昭和期以降には、趣味として名墓を見つけ巡礼するという従来の営みを継承しつつ、同時に故人の供養をも目的とする「掃苔道」を提唱する民間団体が現れ、名墓の顕彰と保存を目指しました。しかし、民間の力だけでこの目標を達成することは困難であったため、掃苔道の実践者たちは、先祖祭祀を重視する日本にとって名墓の保存顕彰は重要だという言説を繰り返し、国家的な事業を呼びかけました。また、昭和5年頃に登場した「墓相家」たちは、「日本民族固有の伝統的で正しい」墓の立て方をマスメディアで披露しました。人々は、不安定な世情の中で家の断絶を恐れたり、新たな墓制における墓の知識や規範を求めたりする中で、書籍や雑誌を通して墓相家の言説を受容していきました。

## まとめ

このようにして、日本では明治期以降に先祖を祀る国民という国家的アイデンティティが成立するとともに、文明化や都市化にふさわしいものとしての近代的な墓制が成立しました。これは「日本の国民習俗」にふさわしい「あるべき先祖祭祀」を可視化する装置として「あるべき墓制」が規定された過程であると言えるでしょう。そしてこの過程では、二次的知識人やマスメデ

ィア、進取的な都市住民が大きな役割を果たしていました。

## コメント

本書は明治期から昭和戦前期を対象として近代的な先祖祭祀と墓制が形成される過程を検討したもので、現在のお墓や弔いにまつわる問題を直接的に考えるものではありません。特に、本書でその形成過程が提示された、日本国民が皇祖に繋がる先祖を祀る民族であるというアイデンティティが現在も自明視されていると考えることは難しいでしょう（また本書もそのようなことを述べるものではありません）。

一方、現在の墓地でよく見られる家毎のお墓や、墓参りによって先祖への敬愛を示す実践がどの段階でいかに生まれたのかを知ることは、ひるがえって自分自身や家族の弔い方を考えるときの参考になるはずです。カロート式の家墓が一般的な墓の形として現れたのが明治期以降であることに歴史の重みを感じる方もいれば、意外に最近のことだと思う方もいるかもしれません。家の墓を一層大切にしようと思う方もいれば、家の墓はあくまで選択肢の一つに過ぎないと考え、散骨や樹木葬等の方法を選ぶハードルが下がる方もいるかもしれません。いずれによせ、お墓や弔いに関する歴史的な背景を知ることが、身じまいの仕方を考える際の指針の一つになるでしょう。

坂本郁人  
京都大学大学院文学研究科・修士課程

SMBC京大スタジオ「誰もが生・死後の尊厳を保つための持続可能な身じまい・意思決定とその支援」プロジェクト（幸せなしまい方PJ）ではさまざまな領域の意思決定を対象として文献調査を進めています。詳細は[プロジェクトのウェブサイト](#)と[調査報告アーカイブ](#)をご覧ください。

ご意見・ご感想は[info@ethics.bun.kyoto-u.ac.jp](mailto:info@ethics.bun.kyoto-u.ac.jp)までお願いいたします。